月陰のイーリス

玖堝々永

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月陰のイーリス

【Ｎコード】
Ｎ２５０８Ｐ

【作者名】
玖堝々永

【あらすじ】
大学生で苦学生である『夕月　憂』は眼帯をした色白の少女のようなナニカに出会う。果たして少女の目的とは一体……。絡み合う一人と一柱？の運命はどうなってしまうのか。荒唐無稽能力者変態恋愛長編オリジナルストーリー

朧（前書き）

初投稿。何分至らない所が多々――ありますが、生暖かい目で見守ってください。

不定期更新……！
表現が間違っている……勉強不足……！
厨二病……！
圧倒的な……圧倒的な……ルビ不足……というか不慣れ……！
キャラが変態しかない……！というか作者も変態……。

なん……だと……

なお、過剰描写&厨二病やくどすぎる地の文が苦手な方はオススメしません。

朧

「ふぅ……」

視界全体に広がる大空は、瞬く間に景色を変えていく。
太陽はまばらな雲によって何度も見え隠れをし、
そのお陰でジリジリとした太陽光線と比較的爽やかな風の流れが交互に襲い掛かる。
「不快感と快感が順序よく待ち構えているその様は、人生に似ている」
と、一般人は解釈するだろうか。
そうであれば、俺は一般人と一線を画しているといえなくもない。

――否、実際はそうではない。
それ自体、自分自身を一般人という括りから逸脱させたいという所謂「異端」への憧れからに過ぎない。しかし「比喩」そのものを想像してしまった時点で、俺は自ら「異端」への門を閉ざしてしまったといえる。
厳密には、「異端」への憧ｒ

「あちぃ……」

耐え難い熱光線により、思考が途切れてしまった。流石、夏。夏ちょーやばい。

十五時二十七分現在、我が大学の誇る第七号棟・通称「食堂棟」屋上。

一号棟から八号棟まである中で、唯一この「食堂棟」だけが、屋上を開放してある。
飛び降り防止のため柵を設けており、屋上の扉には『屋上及び、屋上階段付近での球技等禁止』という張り紙が張られている。とは言っても、この棟の屋上から飛び降りても重症どころか、軽い怪我程度で済むほどの高さらしいのだが。らしいと言うのは、「我こそは」とその高さに果敢に挑む馬鹿野郎（ゆうしゃ）を、俺は知らないからだ。

ふぅ…何だ。説明だけで二分が過ぎてしまった。
———さて、では続きを。
所彼処に存在する雲は、空という大海原の中では酷く矮小であるが、点在する雲の形状が多種多様であるのは概ね認める。
認めるのだが……。だが……。

続きが思い浮かばない。どうやら俺にはこの手の想像力やら文章力は皆無に等しいようだ。俺の語彙力自体はそこまで低いわけではない（と思いたい）が、このうだるような暑さもあってか、ある程度継続しても横道に逸れてしまい、肝心な所までは到達できないでいる。

「三時半か……。そろそろ頃合かな」

握っていた携帯電話で時刻を確かめ、硬いコンクリートに横たえていた体を少しずつ起こしに掛かる。右腕、左肘、頭、上半身の順に体を動かし、ようやく半身を起き上がらせることに成功する。次に下半身を足と両手を使って引き上げるのだが、どうにも上手くいかない。
1時間近くこの体をコンクリートに投げ出していた所為か、体の節々が悲鳴を上げる。主に背中のあたりが。

「はぁ〜〜〜」

深いため息を一つ、そして体全体を空に向かって牽引する。
重力に蝕まれたこの体の重量は全て足先に集中する。
よろけるのも又一興、と思った時点で踏み止まるのに成功したらしい。
閉じた携帯をもう一度開き、時刻を確認する。
離れて見ようが、間近から見ようが、斜めから見ようが十五時三十分の数字は未だ変わらない。いや、今さっきその数に一が追加された。

「そろそろ行くか」

自らの戒めも含めて、心持ち声高らかに言ってみる。
場所が場所なら、独り言を呟く不審者にも見えなくもない。
だがこの屋上は、俺以外人の気配はない。
実際隈なく捜したわけではないものの、俺の右前方に存在する貯水タンクの裏にでも隠れない限りは全て見渡せる。

———道化のような行為を大衆相手に出来るほど、俺は肝が据わっていないからな。

ひとりごちて空を見上げる。
当初のアメと鞭のように襲い掛かってくる熱と風は、配分を変えて降り注ぐ。
太陽が隠れなくなったようだ。はてさて、夏の到来とみるか、それともこれが本当の人生の比喩として見るか。

……まぁ、当初の目的、見舞いにでも行くか。
四時限目に続く、五時限目もサボる事になりそうだが。

・柏坂総合病院

・病室B

我が大学から徒歩にして十五分の位置にそびえる、一つの病院である。
総合病院と銘打ってはいるが、外科、整形外科を重点に置いているらしい。
その原因はこの病院の近くに、小規模ながら内科・耳鼻科・歯科等の診療所が点在することに起因する。実際、国立でも公立でもなく私立で、ここの病院長が経営してるものらしい。

入院患者数：わらわら　医師及び救急師数：そこそこ　看護師：うじゃうじゃ

――等の特徴が挙げられるこの病院。
備考として、看護師と明記してあるが、実際にはナースが大半であり、
昨今の看護師等の減少傾向からは考えられないほどの数を誇るのは何故だかは知らない、というか知りたくない。「だから何」と言われればそれまでしかない情報である。
それまででしかないのだが。

うん、この際言っておこう。

「大学から徒歩十分」との病院までの地図に書かれていたが、実際に所要した時間は三十分だった。迷った、順路通りの道から外れていた、途中休んでいた、徒歩自体のスピードが遅かった、産気づいた小母さんが倒れていた…
等々、挙げられる項目に該当する事象は一切なかった。
強いて言うのであれば信号待ちをしたが、個人的推測からして一分のロスにも満たないものである。

――にも関わらず、二十分近い差があったのは一体どういうことだろうか。

「なぁ…そこらへんどう思うよ、佐々森？」

顔の素材はそこまで悪くはないが、大雑把な性格故に剃りきれなかった髭が印象に残るこの男。鋭い目つきのように見えて実際は眠いだけのようであり、思考に耽っているように見えて実は何も考えてないらしい。そんな白いベッドの上を本で埋め尽くして猶、暇を持て余しているようでも、やる気がないようでもある目の前の朴念仁に問いただす。

「お前が渡してくれたこの病院までの地図。確かに正確なものだったと思う。下手な人間が描く即席の地図と比べればよっぽど判りやすかったし、ご丁寧に縮尺まで書かれてるのも評価しよう」

「そうか。役立ってくれたか。いやぁよかったよかった。右手を庇いながら苦労して作ったかいがあったもんだよ」

屈託の無い笑顔でよかったよかったと繰り返すその様は、女子の人気を高くする要因と思える、が実際はそうでもない。女子が比較的多いと言われる我等が大学ではあるが、学科の違いもあり俺と佐々

森は大学の女子生徒と関わる機会が少ない。
…訂正しよう。俺より比較的、佐々森は多いはずだ。

「ああ役立ったさ。役立ったとも。だけど少し不可解な点があってな」

「不可解な点？」

奴が疑問を口にした直後に俺は息を大きく吸い込む。
白と肌色に染められた病室内と絹製のカーテンで遮られている向こう側の空気さえ飲み込むほど大きく。今まで貯めていたストレスを解消するように力強く、先程までの鬱憤を晴らすように声高らかに。
だが、何処かから「此処で、病院で大声を出してしまったら周りに迷惑」という思考が過ぎる。やはり人間、常識という枠からは中々抜け出せないようだ。

結果。

「あ～まったく、なんで徒歩１０分なんだよ。どう考えても３０分はかかった。詐欺だ」

上がってるんだか下がってるんだか判断のつかない微妙なテンションのまま声を上げる羽目に。そして渡されたＡ４紙の地図を突き出す。まったくもって、不完全燃焼である。その上、格好悪いことこの上ない。無理に抑えようとした為、言った言葉が自分でも聞き取り辛いものとなっていた。心なしか、遮られたカーテンの先からはお年寄方の失笑すら聞こえる。ような気がする。

「あ、ごめん……　これ間違えてたわ」

「はぁ、いいよもう」

佐々森が迂闊で残念なのは今に始まったことではない。
実際、こいつが病院送りになった理由もある意味ドジでガッカリな性分に起因している。
自転車で走行中、信号無視をした車をなんとか避けたものの、勢い余ってガードレールに激突、肘を強打。一緒に居合わせていた俺に対し平静を装ってはいたが、変な方向に曲がっている腕は流石に隠しきれず、そのまま俺に連れられて病院送り、そして入院。簡易手術をこなし今に至る。

余談であるが、冷静に怪我の対処をしながら間違えて消防車に電話してしまい、一見冷静さを装いながら脂汗を垂らしてテンパっている佐々森の姿を俺は忘れない。

「あー、これでよかったっけ」

鞄の中から取り出だしたる「〇ーフィーの法則」。全体的に薄黄色を帯びた、小さな本だ。
こいつが入院中に借りたいとせがんでいたブツである。
俺が貧乏学生の身である以上、手の込んだ見舞い品は無理だ。
だが、本を借りてくる位で済むのだからこいつはある意味安い人間ではある。

「サンキュ。いや、病院生活は暇でね。助かるよ」

「あー座って座って」

俺は出された丸椅子に座る。しかしこいつも変な人間だ。先程の本の中身といえば、

「起こる可能性のあることは、いつか実際に起こる」
「作業の手順が複数個あって、その内破局に至るものがあるなら、誰かがそれを実行する」
「トーストがバターを塗った面を下にして着地する確率は、カーペットの値段に比例する」
…などという実にネガティブな思考と可能性を書き殴ったものなのだ。
理解は出来なくは無いものの、やはり目の前の人物の様に笑顔で読める代物ではないと思うのだが…。
まぁ良い、佐々森が笑顔のまま本に集中しているのを邪魔しちゃいけないと思い、席を離れようとする。
――――やれやれ、一分も立っていないというのに呆れるほどの集中力だな。席を離れた俺に見向きもしないとは。

私用を片付けてほっとした瞬間、どっと喉の渇きがでてきた。
今更ながら、この季節に徒歩を三十分、とは正気の沙汰ではないと思う。
最も目の前にいる人間は　大学から徒歩で大学の寮まで遊びに行く猛者である。
というのも寮と佐々森との家は間逆であり、大学から走っても三十分、更に佐々森の家からでは徒歩一時間半であること、
そして正直なところ電車で行き来したほうがずっと早いことも明記しておく。

・病院廊下

今更ながら病院と言う場所はどうも辛気臭い。
何度も味わってきた空間だが、慣れるという状況に辿り着くまでは

随分と先のようだ。
視線を横切ってくる老人の瞳には個人差が在るものの、生気が薄い。
痩せこけた体、猫背のように体を折り曲げ、点滴をぶら下げたアルミ製とおぼしきバーを気だるそうに引き連れる。
俺はその姿を見る度に喉の渇きが増幅されるような感覚に囚われるのだ。

平静を保ちながらも、歩幅だけは何故か広くなっていった。
それは彼らとの決別の意思ではなく、単に俺が思い出したくないという身勝手な理由だ。

「ちっ」

友人の見舞いじゃなければ誰がこんな場所に来るものか。
そうだ、階段まであと少しだ。そういきり立った、まさにその瞬間だった。

「！！」

不意に空気が変わった。

先程感じた老人の群れが醸し出す暖かさはない。
冷え切った室内の中漂う生温い加齢臭などはそこ一帯には存在していなかった。
そこにあるのは、生温いこの空気を吹き飛ばすほどの熱量ではない。
病院に漂う独特の寒さや室内空調による涼しさを感じないほど超越した冷気でもない。
更に言えば弱く脆い人間達が集うこの場所には相応しくない、飛びぬけた威圧感や殺気でもない。

では何だ。この理解できない感覚は。

まるで　そこにある空間が　別のモノにすり替えてしまった　この妙な違和感は
階段を上ってきて　足元を見なかった結果　最後踏み外してしまったような　あの　感覚に似ている
背中に　わけのわからない　存在　がいるような錯覚に陥る時がある　あれにも　何処か似ている

後ろか？
この感覚は前にではなく後ろに存在しているというのか？

興味半分恐れ半分に後ろを振り返って見る。

「汝（なれ）、中々良い瞳をしておるな」

そこには　薄気味悪く　美しく　まるで強い瞳に俺自身が吸い込まれそうな
上手く言葉で表現できない　だけどその言葉で十分だと俺は判断する

そこには美しい少女がいた。

目の前に存在する少女、その姿は異様だった。

まず彼女は車椅子に乗っている。足を怪我或いは病魔などに冒されたのだろうか。
だがこれは此処が病院である以上違和感は感じられない。
次に服装。黒と白の二色のみで構成されているその服はさながら修道服のようだ。

頭部は黒のベールと同調した艶やかな黒髪のショートヘアー。
体自体も小柄な所を見るにまるで子供のようにさえ見える。

成程。
どうやら、彼女が異彩を放っているのはそれらの部分ではないようだ。
もっと強い……ああ、なんだ瞳か。

そう、彼女の瞳そのものだ。

右側の瞳は眼帯によって隠されている。
肌の色は酷く青白く、まるで眼帯そのものが皮膚と同化しているような。
その眼帯という存在は何かを隠すという存在ではなく、元から存在していた。
そんな嘘の様な比喩が当たり前に通用する。否、其れが事実として変わってしまうのだ。

残るは左の瞳、こちら側は眼帯で覆っている右眼と異なり、底知れぬモノを感じた。
単なるライトグリーンと黒の二つのみに彩られているただの瞳だ。
綺麗な翡翠色を演出するその瞳は何かを訴えかけるのではなく、何かを求めるのではなく、唯、漠然とそこに在る。
在るという事実だけを物語っている癖に、なんとも形容し難い光を放っているのだ。
あの瞳は多くの事柄を知っている。何もかも識り過ぎている。
有象無象の区別なく、ただ我武者羅に知と智を兼ね備えている化け物。
不意にそう感じた。訳も理由も存在しない。何故なら自分自身の知識を総動員しても語れる自信が無いからだ。

嫌悪と畏怖と尊敬と憧憬の感情が入り混じり、何時の間にか目の前の少女を誇大広告の看板として掲げ上げている自分がいる。
だが、それを当然であると誤認して止まない自分がいる。その癖、不愉快を感じない。感じさせない。

ドクン　ドクン

心臓の鼓動が徐々に速まっていた。
異常事態だあの瞳に心酔している。あの瞳によっては俺の、自分自身の心が浸水されている。
侵されている。あんな人間とも思えぬ瞳に俺の理性が掌握されてしまっている。
其れが万物の理で在るかのように、俺は平伏している。
神などという偶像崇拝と同じように、俺はその瞳を讃えている。

ドクンドクンドクンドクン

更に心臓が加速している。もうこの鼓動は止められないのだろうか。
いや、この鼓動こそが、この騒々しくも気高く、地獄の様に熱く悪魔のように甘い旋律が、その少女への
いや、彼女「――――――――」へのあか……

違う。何かがおかしい、何処かがおかしい、何故かキチリと歯車が合わない。
このまま冒されても　然して問題は如何ほどのものであるのか。
違うんダ　解らないケどなにかが間ちがっテいる
まチガえたって　イいじゃなイか
ソウさ　コれハキっとν…Ωト弟デ――イァイァ

「汝(なれ)、どうかしたのか。ふふ、さては我に見惚れたか」

「！！」

そうだ。いや、違う。
その少女の一声で我に返った。
何秒、いや何分、何十分自分はこうしていたのだろうか。
汗はかいていない。空調のお陰ではない、俺は汗すら出なかったというべきなのだろうか。
ただ、一つ確実なことは、俺は今、完全に彼女に圧倒されているということだ。
たかが車椅子に乗った、小柄な少女如きにだ。

「我の言葉だけで戻ってきたか。なるほど、我の眼に狂いは無かったということか」

可憐でいて下賤な微笑みを浮かべている。
それは一見無邪気な子供の笑みの様に見えて、自分の思惑通りに事が運ぶのを悦んでいる大人の小汚い笑いそのものだ。
胸が悪くなる。俺だって末端とはいえ、社会の中の一部の歯車として廻っている。
以前にも、似たような嘲笑いを見たことがある。だが、アレとはまるで程度が違う。

「そりゃ、よーござんしたね」

皮肉交じりに噛み付いてみたが、次の瞬間その発言を撤回したくなってきた。
まず足が動かない。整備不良なのか、車椅子がキーという悲鳴を上げながらこちらに進んでいく。
お前は幽霊か、それとも妖怪かと小一時間問い詰めたいね。足が動

かなくなるのは仕様ですかそうですか。
周りを見渡しても病院の廊下なのに誰も居ない。酷い、詐欺だ、横暴にも程がある。

車椅子が音を金切り声を立てて進む。

ああ、ついに少女が目の前に辿り着いた。距離にして二人の差は一メートルもない。
こうして間近で少女を見てみると、その美しさは細部にまで亘っているのがよく判った。
色白の肌はもとより、何よりヒゲ、ニキビやその他出来物が全く無い。さながら人形のようだが、
まずその時点で目の前の人物が人間として存在を得ていることに疑問を隠しえない。

――――そして俺は、まるで他人事のように冷静に少女を観察している自分に気が付き、呆れた。
さっきまで思考を奪われていたくせに、今はのんきに目の前の少女の批評をしていたからだ。
足だってまともに動かせないのに、頭だけはやけにハッキリとしていた。

ソレは、しばらく俺の顔を見つめていた（もうあの忌々しい笑顔ではない）が、
やがてその蝋人形のような顔を此方に寄せてニコリと笑顔を放ちこう言った。

「今から我はしばし、独り言を唱える。汝に許可を求める。良いか」

車椅子の御蔭か、丁度掌で頭を撫でることが出来る最適な位置に彼

女は居る。
オマケに此方の顔を窺うように見上げてくるのだ。これは卑怯極まりない。
しかもその顔は媚びている物ではない。あくまで助力を乞う慎み深い表情で、
その表情に耐え切れなくなった俺は頷くしかなかった。

「汝(なれ)は良い眼をしている。その眼はまさしく水辺を這う魚の様に濁り、まるで底知れぬ漆黒の沼のようだな」

彼女は不遜な笑みでそう呟いた。
突如としてその頬は三日月の様に捻じ曲がり、吊り上がった。
それでもその奇妙な美しさが損なわれなかったのは、最早神の御業であるとしかいいようがない。
そして彼女は、一つ一つ噛み締めるように言葉を紡いだ。

「現世(うつしよ)に眼差しを注げず、唯々彷徨い続けている其れは如何なるを見つめるか。
空(うえ)を捉えるよう、崖だらけの道を光に照らすか？
それとも足元に転がる彼等とそれ等に類する道を捜し求めるか？
虚ろな其れを糾し、直向に前を映し続けるか？
否、そうではないか」

スッ

気が付いたら、俺はいつの間にか彼女と同じ視点になるように膝を抱えていた。
無意識のうちに行ったこの行為を疑うどころか、俺は信じきっていた。
彼女と同じ視点に立てる事。

その事自体がまるで何かの御褒美であるかのように俺は心酔してしまっている。

トクン　トクン　ドクン　ドクン　ドクン

壊れたメトロノームのように不安定な音を吐き出す心の臓
1メートルの距離から段々と彼女は近づいてくる
それにつれてメトロノームは原型とは異なる形に姿を変えていった
今　此処で半分を過ぎた…

ニコッ

彼女は目を細め、そして微笑んだ

「そうか」

「汝も我と同じく、薄汚れた道を照らすか。それもまた良いだろう」

「我が名はイリス。少年よ、いずれまた」

「……イ、リ、ス」

俺が声を発する事が出来たのは「イリス」が車椅子の金切り声と共に去っていった後だった。次に元通りになったのは眼、彼女と会ってから人っ子一人いやしなかった歪んだ空間が徐々に姿を現す。白く均整の取れた病院の廊下と行き交う顔色の優れない患者達が見える。

俺にとっては不快なモノであるが、今はそれが何故か安心できた。
次は聴覚。キーンというやけに高い音とまばらに現れるノイズ。
最初はラジオの様なブツブツと音を立てていたが徐々に無くなりいつしか静かなものになっていった。それから体の感覚全てを取り戻すのにそう時間はかからなかった。

腕が動かせるようになり、そして早鐘を打っていた鼓動が徐々に収まっていく。
何故自分はこうしているのかと問いかける。
ああなるほど、立ったまま白昼夢を見るとは俺も疲れているんだろうな。
昨日なんて朝までバイト三昧だったんだ。仕方ないな、これじゃ。
にしても出来の悪すぎる夢だ。あれじゃ今までの悪夢が霞んで見えちまうじゃないか。

「あ……、あ……？」

あれ、何で俺は震えているんだ？　一体全体何が起きたんだ？
ガチガチと歯が触れ合う音が非常に煩わしい。しかし、止まらない。
どうしても止められない。視線を下にずらすと奇妙なほどに膝が笑っている。
掌を見れば、まるで中毒患者の様に小刻みに震えていて、やはり止まることをやめない。
もう片方の手を使って震えを止めようとするが、治まるどころか震えは増すばかりで、まったくもって腹立たしい。
くそ！　何で、何でこうな―

「おい、どうしたんだよ」

「！！」

俺は突然右肩に乗せられた手を乱暴に払いのけた。
そのまま後ろに振り向くと、そこには驚きの表情を浮かべている佐々森の顔があった。

「ふぅ……脅かすなよ」

「いやいや、それ俺の台詞だろ。どうしたんだよ、こんなところに突っ立ってて……しかもいきなり暴力振るうかお前は」

「――悪ぃ。ちょっとな……。腕大丈夫だったか？」

確か、右腕肘……。何だっただろうか。いまいち良く覚えてない。
肘関節の下部単純骨折とか言っていたのは記憶に残っている

「まぁいいさ。ちょっと飲み物買いに行くんだが、お前もどうだ？」

「判った。それくらい奢らせてやるさ」

「サンキュ」

俺と佐々森はお互いに余計な詮索をしないことになっている。いやそうなってしまったと言うべきか。出合った時こそ犬の様に付き纏ってきたが、折れる時は比較的簡単に折れるし、先程の様な奇行にも何も口出ししない。

俺も同じく佐々森の奇異な行動には特に何も言わないようにしている。まぁ、正確には言うのが非常に面倒なだけだが。

ともかく、それらの行動が積み重なった結果、自ずと互いのパーソナルスペースを理解した間柄になった。そういった配慮も出来る友人は自分で思ったほど多く無く、片手で足りるほどしかない。その中でも特に思慮深い人間……のように見えて、実のところ抜けていて、良く判らない人間である。だが、どんな人間にせよ、大学生活前期では奴のノートには随分と助けられている。さて少しくらい恩を返さないとな。そう思いつつ、二百円の出費にため息を吐くのだろうか。

・病院内１Ｆ　Ｃフロア　売店付近

店員「ありがごとうございましたー」

こうして俺はなけなしの百円玉二枚を「造詣としては良い線だが、度重なる疲労のためか皺が比較的多い女定員。推定四十台」に進呈し、代わりとして紙パックジュースを贈呈された。物価高騰の波を受けてか、五百ミリ紙パックジュースは買えず、内容量の少ない二百五十ミリのアップルジュースしか買えなかったのは想定外だ。財布の中にはそれ以上の硬化は入っておらず、仮にあったとしてそれはきっと気紛れに拾った使い道の無いメダルしかないのだろう。意地だけで生活してるからそうなると、耳の痛い言葉が何処からか飛んできそうだ。そういったネガティブな思考を少ない果汁で紛らわし、冷たい液体の冷気で喉を潤す事を実現せしめた場所はやけに人通りが少なかった。奴曰く、使用頻度が少ないフロアであり、更に大きな病院には必要不可欠なエレベータが近くに存在しない場所だからだそうだ。

「で、話ってなんだよ？」

どうせなら状況を楽しもうとして無作為にも、場に合った言葉を選んでみる。

「じつは……前から言おうと思っていたんだが、憂。君の事がす――。判った頼むからそんな眼で見ないでくれ。冗談だ、冗談。何、お互い金欠者同士。ちょっとした有益な話をだな」

「有益ねぇ」

余談だが、佐々森がこういった形で進めてくる話には正直有益なものは今まで存在していない。やれ、政治の暗黒部分についてだの。やれ、吸血鬼の存在性だの。宇宙の広大さだのとにかく実生活に役立てる話は今まで皆無だった。確かに中には興味深い話も……あるにはあったが、どうも信憑性に欠けるものばかりだった。だが、毎度の事の暇つぶしになるのは間違い無かった。携帯で時刻を確認したがバイトが始まるまで随分と余裕がある。怪我人の与太話と思えばいいか。

「まぁ、ゴシップだろうが聞くけどさ」

「手厳しいなあ」

苦笑いを浮かべながら、アップルジュースを飲み干した後、佐々森の表情が少し変わる。元々眠そうな瞼がしっかりと開き、ようやく真面目そうに見えなくも無い面になった。本人曰く集中しているつもりらしいが、欠伸を噛み殺して必死になっている様に見えてしまうのは佐々森の普段の行いの性なのか。

「なぁ、この総合病院ちょっと変わってると思わないか？」

「またその手法か……」

奴の有益な話は、大抵ふとした疑問を投げかけてくるという始まり方をする。
どうにもこの話し方が自分の性分に合ってるとの事。
何度も有益な話を振られた俺にとっては今一つ、新鮮味に欠ける。
もっと酷く言えばワンパターンと言えなくも無い。

「まぁ聞けよ。この総合病院は他の病院に比べ、やたらに看護師やら医師やら多くないか」

「他の病院なんて殆ど行った事ないから判んねぇよ。まぁ多いほうだと思うがな」

確かに此処の病院の看護師等の数は多い。というより暇を持て余してるといえる。
少し離れた裏庭に行けば、タバコをふかした看護師なんて良く見る光景だ。他の病院と比べてかそうか。

「おかしいな」

「まぁ判るだろう。今の時代を考えれば流石にあれだけの医師、看護師を遊ばせとく余裕は無いはずなんだがな」

正しいかどうかは別として、メディアの情報では少なくとも医師、特に看護師数が減少傾向にあるらしい。医療制度の見直しやどうだら……というのはあまり興味は無かったものの、ニュース等で見た

ことがあった。俺みたいに情報に割と疎いタイプでも知ってる事実である以上。どうやら真実味が増してきた。

「ちょっと調べてみたんだ」

何処からかコピー用紙５枚いや１０枚に上るだろうか、そこには埼玉私立４総合病院の経営状況報告書と書かれていた。
近頃のネットにはこういうものも落ちているのかと感心する間もなくとあるページを開かされた。

「あれ？人件費は他の病院と大して変わらないんだな」

少し妙だな。と少し呟いた瞬間。突如として水を得た魚の様に佐々森は語り始めた。

「ああ。妙だ。それでな、調べてみたんだがこの総合病院は不正という不正の話がまったくと良いほど聞かない。確かに不正を行っていないという証拠は何処にもない。だが、現に病院はこれだけの人員を抱えながら、病院としてある程度の収益率を得ているんだ。それだけじゃない此処のデータを参照してみろ。この御時世には珍しく、患者数はそれほどでもなく、空病室は何故か多い。それから―」

こんなデータが――それを元に――此処が不透明だ――

等々、病院生活で貯まりに貯まった鬱憤を晴らすかのごとく、語る。語る。語る。
奴にしては珍しく配慮が出来ているというものだろう。
人気の無い場所を選んだはやはりこの為で、周りの人間に対する自分の迷惑さを理解した結果なのか。いや、少なくとも俺にある程度の迷惑をかけてる時点でそうでもないな。

やつの話を鵜呑みにするのは問題だが、話半分に聞いてる程度は中々興味深いモノがある……がそろそろ頃合か。

「……で結論は」

「この病院には政治的な何か、特に大物政治家が関わってると見た！」

ズビシ！と効果音でも出そうなほど大げさに身振り手振りをする様はなんとも滑稽だがこの際置いておく。

「１０点だな１００点中」

その言葉に急に奴のやる気が無くなるのはいつもの事だ。元々見てくれは真面目に語っているものの、本人自身眉唾モノとして話している。こいつの話は想像の域を超えておらず、簡単な推理小説。いや、幾分前に連載されていた漫画に似ている。どういうわけか俺が点数を付け始め、その点数によって一喜一憂する佐々森を見るのが恒例行事と化してしまっている。今回俺がつけた点数は平均より低め。何より想像の域を出てない事が丸判りな時点で既に残念である。

「あー結構今回は自信作だったんだけどなー」

「病院内でやるからには限度があるんだよ、また次頑張ってくれ」

こいつのバカ話も入院していても結局は変わらないんだなと少し安心した。

さてと、十六時五十分。そろそろ頃合だろう。一応入院患者を此処までほっぽとくのもあれだろうしな。

「さてと、俺はそろそろ帰るわ」

「ん～そうか、積もる話もあったんだが。じゃあせめて玄関前まで送らせてくれ」

こういった無駄に懐っこいのも佐々森の魅力ではないだろうか。
問題としてその矛先はうら若き女性には向かず、こんな野郎に向いてる所。
その奇妙過ぎる性格も災いとなっているだろう。
俺もこんな奴と付き合ってる時点でおよそ同類なのが非常に滑稽である。
だが、俺の知る限り。知人でこいつほど暇つぶしに適した人間は居ないだろうと思えてしまう。

・病院内1Fロビー

白と青という静かな色合いをメインで作らたはずのその場所は多くの患者達で埋もれ、その色合いの意味を失った。
その代わりに青褪めた肌色の待ち合う患者達と薄暗く照らす蛍光灯の光が微妙に混じりあい、ものの見事に負のハーモニーを形成している。
四時ほどに来たとかは疎らに人が行き交う程度だったが、どうやらこの混雑の様を見る限りは佐々森の話は単なる妄想で終わりそうだ。
ある程度人件費に余裕を持てるほどの稀有な例とも言ったが、奴の話では埼玉県自体の医療による利益率は上がっているようだし。
心配するほどのことでもないだろう。

「果物とかそういうの持ってこなくて悪かったな」

「お前が金に困ってるのは今に始まったことではないしな」

一言余計だ。

しかし不思議なものだ。入院している奴の方が生き生きしていて、見舞いに来る奴のほうが何故か疲れていて。

立ち位置が変だ、それがやけに心地よい。今まで俺は人生という奴を憎からず思っていた。

だが今はどうだ？今は判らない。唯、恨むのも悩むのも疲れてきたほど、佐々森達の存在は喧しかったのだろう。

「ありがとな」

「？」

ならこれも立ち位置を変えても問題ない。

佐々森は先程の俺の奇妙な行動に戸惑いながら、病院玄関を抜けた俺に対して手を振るう。

まるで子どもの様に腕を振るう様は年相応とはいえない。腕を大きく振りかぶっていないだけいくらかマシだが奴の行動は歳相応では無いのは明らかで何故か俺のほうが恥ずかしくなり眼を背けた。だが、ふと考えてみる大学生という身分はまだ学生でしかないのだ。そして俺らはまだ二十歳すら過ぎていない年齢だ。そんな甘ったるい青春のような思考を俺が閃いたという事は昔では考えられないのだろう。やれやれ、酔狂な行動を俺は二度も取ってしまったのだ三度目だって問題は無かろう。そう自分に言い聞かせながら振り返ってみる

「――あれ？」

視界のピントが合わない。目の前には病院と佐々森と入院患者とその他の物質の集まりがそこに存在していたはずだ。だがそれら一つとなった風景が水辺に写った景色のように不明瞭に揺れている。近くにある階段は綺麗に脳に認識されているはずなのに、肝心の佐々森が良く見えない。

まるでそこだけに雲が架かったように酷くぼやけている。

視力はこれといって悪いわけではなく、乱視というわけでもない。眼が疲れているのだろうか。だが賢明に目を擦ってみても揺らぐ景色と雲は無くならない。

何故だろう。わけが判らない。突然病気にでもかかったのだろうか。だが自分の知識を総動員する限り、これほどまでに

はっきりと、しかも早期に症状が現れる目の病など聞いたことも無い。

だが、不意に漠然とした結論が突然の頭痛と一緒に舞い降りてきた。俺が見るのを避けている目を通した光は確かに入り込んでいるはずなのに頭がそれを拒否してるというのだ。それほどまでに恐怖なのだろうか。人間は物体として見て知ることによって恐怖を取り払う存在ではないのか。あれはそれほどまでに恐ろしいモノなのだろう

か。
抗いたかった。抗ってみたかった。出来ることは恐らく無理だと認識していたがそれでも抗うのを俺は止めなかった

「イ……リス？」

たった一瞬見えた一コマ限りの映像で俺は理解した。
今日出合った恐怖は白昼夢ではないことを。あの出会いは間違ってはいなかったのだ。
佐々森の後ろに見える艶光した黒髪と眼帯、翡翠色の瞳、車椅子。
何もかもを全て理解しているような　識っているものだけが見せる余裕。
歪んでいて、だが見ている者を安心させるようなその笑み。

不意に視界がブラックアウトした。
眼を閉じたわけじゃない、恐らく彼女が仕向けたことだろう。
人々の雑音が無くなり、次第にそれが唯のノイズとなり、そして音は存在しなくなった。

そしてまたノイズが耳を、体を鼓動させる。

『我が名はイリス。イリス＝アー＝フロレンス』

『汝（なんじ）は　、　汝（なれ）は』

『いや――貴方の名はいかなるものじゃ』

「ゆう……夕月　憂」

薄れゆく意識の中、ただ名だけを呟き続ける自らを見て思った。
その日から俺は、自らの人生を憎み、恨み続けることを始めたのだ。

朧（後書き）

この「月陰のイーリス」は作者が深刻な厨二病をこじらせた時に書いたものです。

主人公とヒロインの純愛&能力系現代ファンタジーです。

登場キャラクター全て（男、女、人外、ロボ子、メインヒロインを含む）厨二病をこじらせています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2508p/

月陰のイーリス

2010年12月2日08時18分発行